



Title	北海道家庭学校礼拝堂について
Author(s)	千里, 政文
Citation	基督教学, 37, 17-20
Issue Date	2002-07-04
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46649
Type	journal article
File Information	37_17-20.pdf



北海道家庭学校礼拝堂について

キリスト教会施設に

関する基礎的研究

千里 政文

一 はじめに

本稿は遠軽町にある北海道家庭学校礼拝堂の礼拝堂（以下、礼拝堂）について、創設者である留岡幸助（以下、留岡）の人間関係などを基に、実測調査、及び文献調査を行い、建築手法や設計者を探ると共に現状の把握と考察する事を目的としている。

二 北海道家庭学校の沿革と礼拝堂

北海道家庭学校は、創設者の留岡により、明治三十二年東京巢鳴に創設した家庭学校の杜名淵分校として、大正三年に遠軽町の原生林を開拓して始めた感化農場であり、自然の中でキリスト教精神を基とし、社会不適應におち

いった少年たちを自立に向け支援する、民間児童施設である。今回の研究対象である礼拝堂は、特にこの学校の精神の中心となっており、「望の岡」と呼ばれる小高い丘に建てられたプロテスタント教会である。その献堂式（写真1）は、家庭学校の杜名淵農場の五周年式に合わせ、大正八年八月三十一日に執り行われた。残っている文献等から、建築費は約一万円、用材及び石材は、農場の原始林を切り出し本農場付属製材所において製材し、土台にする石材も全て大地を開墾した時に地中から掘り出した石が用いられた事が判明した。しかし、現在礼拝堂の設計図は紛失され、設計者が不明となっている。また、聞き取り調査等から、建築には大工の松原総八や松田政治らが関わったとされ、当時、遠軽町の大工である父親と建築に関わった松田政直からは「設計は関西の人のようだった。」

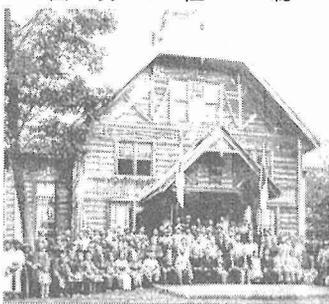


写真1 献堂式

「父が設計図を見ると、符丁が非常にわかりづらく、一・二年かけ自分で合掌の符丁を書き直した。」との証言があった。また内部造作装飾部分の工作は、本校木工部の教師と生徒の手による物が多く、礼拝堂の鐘は、以前留岡が牧師をしていた霊南坂教会から取り寄せて使っていたが、小型で音が響かず、大正一五年、直径二尺の鐘をボストンから得ている。

三、北海道家庭学校創設時の近郊の様子

遠軽周辺では、一八九六年頃より開拓者の手によって基督教の伝道が開始された。基督教大学建設のため北海道同志教育会がつくられ、当時の有名なキリスト者らが各地方から集まり、土地三千町歩を借りて移民を募集した。一九一三年には八二戸の農場在住者の中、三五戸が基督教徒であったと遠軽町史に残されている。また、北見では北光杜の入植と共に伝道が始まり、各地方から集まった入植者に農事指導と共に信仰の奨めがあり、宣教師G・Pピアンソ夫妻の働きと移住により野付牛教会が



写真2 高梁教会



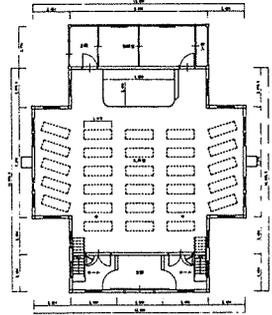
写真3 天城教会

生まれている。現在も北見に夫妻が住んでいたピアンソ館が残されている。そのピアンソ館を大正の初期に設計したのがヴォーリスであり、その設計図が残されている。

四、留岡幸助の人間関係からみた建築手法

留岡がキリスト教を信じ、多くの迫害を受けながらも洗礼を受け、青年期を過ごした高梁教会は礼拝堂建築に大きく影響しているのではないかと考えられ、実際にその当時吉田伊平により建築された高梁教会(写真2)と天城教会(写真3)を実地踏査した。その結果、礼拝堂の造りや部屋、出入口、額の有無、基礎の造り方など、多くの類似点が見られ、その影響を受け造られたと考え

られる。しかし設計者に関しては、他の教会と比べ外観の破風板の装飾飾りが無いなどの相違が見られ、吉田とは異なった人物ではないかと考えられる。



図面1 一階平面図

五、聞き取りと実測調査からみた建築手法

聞き取り調査で礼拝堂の棟梁達が、設計図を理解できなかったため図面を起こし直した事や、関西の人らしいと言う証言、実測調査（図面1）で小さな寸法を不自然に組み合わせた尺貫法が使われ、更に和洋折衷の考えが読みとれること、平面形が北海道には例の少ない形であることが明らかとなり、設計が外国人の可能性も考えられる。

六、おわりに

礼拝堂に関して実測、及び実地踏査を行い、文献等を調べる事により、創設者である留岡の信仰、また人間関

留岡先生は將來此の家庭學校の地に、大きい會堂を建てることを考へてゐられた。先生から其抱負を聞いたのはわたくし一人ではあるまいと思ふ。其設計圖はポーリスさんの手によつて出来てゐる。其設計圖今でも家庭學校の一室に掛られてゐるが、此處から大に町へ呼びかけるつもりだつた先生の意氣がうかゞはれる。
(J・O・生)

資料1 人道より

係を明らかにする事が出来た。しかし、礼拝堂の設計者についての記録は一切見つからず、今回は特定することはできなかった。だが、当時遠軽のキリスト教と宣教師ピアソンの援助等で親密な関係があり、北見市にあるピアソン館の設計者がヴォーリスであり、さらに、東京巢鴨家庭學校の會堂の設計を留岡がヴォーリスに頼んでいたという記述（資料1）や機関誌人道にメンソレタムの近江兄弟社の広告が出ている事などから、北海道家庭學校礼拝堂の設計者がヴォーリスの可能性も考えられる。また、今回の研究により北海道家庭學校礼拝堂は、留岡の信仰と學校創設の理念が込められており北海道家庭學校にとって重要な施設であると同時に、歴史的価値のある建物である事が明らかとなった。また、ポーチや基礎

軟石に沈下が見られ、壁面に大きなひび割れがあり、早急な補修とその保存が必要と思われる。

注訳

(注一) 福島恒雄著『北海道キリスト教史』日本基督教団出版局P二二六。

(注二) 土佐で自由民権の指導者であった坂本直寛、沢本楠弥らが中心となって組織した合資会社。

(注三) G・Pピアソン夫妻は一八八八年日本へ任命され千葉の農村伝道を経て北海道に渡り、室蘭・小樽・滝川・石狩浦臼の聖園農場・旭川・美深・十勝・野付牛・学田(遠軽)の教会に関わってきた人物。

(注四) ウィリアム・メレル・ヴォーリズはメンタームの近江兄弟社を設立し、また数多くの教会・学校・厚生施設の建築設計をした。

(注五) 今治教会の会員で高梁教会、今治教会、伊予小松教会、天城教会の建築の設計施工、元請けに携わってきた。

参考文献

『人道』全一六巻解説・総目次一巻 不二出版、『留岡幸助日記』全五巻留岡幸助日記編集委員会編 矯正協会、福島恒雄著『北海道キリスト教史』日本基督教団出版局、谷昌恒『ひとむれ』第一〜六集 評論社、小池創造『田舎伝道者ピアソン宣教師夫妻』北見教会出、『遠軽町史』遠軽町、『G・Pピアソン小伝』北見ピアソン記念館、藤井常文『留岡幸助の生涯 福祉の国を創った男』法政出版、室田保夫『留岡幸助の研究』不二出版、『高梁教会八〇年史』八〇周年中央編集委員会編